

# おたや祭と山車

# 未

## かぐや姫の誕生の場

むかし、あるところに、竹取りの翁おきなと呼ばれるおじいさんがおりました。野や山に入って竹を取り、それでかごやざるを作って暮らしをたてていました。

ある日、おじいさんはいつも取る竹の中に、根もとが光っている竹を見つけました。不思議に思って近寄ってみると、なかには十センチメートルほどのそれは、それは、小さいかわいい女の子が静かに座っておりました。

おじいさんは、「わたしがいつも見ている竹の中にいた子どもだ。きっと神様からのおくりものじゃ。」と言って、その女の子を手のひらにのせ、家へ連れて帰りました。おばあさんも喜んで、女の子を大切に育てました。

その後、不思議なことが起きはじめました。おじいさんが竹を切りに行くたびに、竹のふしから黄金こがねが出るようになりました。おじいさんとおばあさんは、たいそうなお金持ちになりました。

女の子は、わずか三か月でみるみる大きくなりました。光り輝くように美しいので、なよ竹のかぐや姫と呼ばれました。

## 大坂冬の陣 真田丸の場

慶長十九年(1614)十二月四日未明、雲霞うんかのごとく押し寄せる徳川方の大軍が、真田幸村父子六千が立て籠こもる真田丸に攻めかけた。

徳川方南口攻撃隊（前田・松平・伊達・井伊・藤堂）四万の部隊は、先を争い、統率やだまがとれないまま空堀に突入し、火力重視の鉄壁の砦に隙間なく鉄砲を配置して待ち構えていた幸村隊に、矢弾を雨あられのごとく浴びせ掛けられ、多数の犠牲者を出して前進も後退も出来ない状態おちいに陥おちいった。そこへ大助が指揮する突撃隊が襲撃し、真田隊が白兵戦でも圧倒した。

この状況を見て家康は、何度も撤退命令を出し、夕方になって徳川方は兵を引いた。

激戦の結果、徳川方の被害じんだいは甚大で、大坂方の大勝利だった。

大坂冬の陣で、真田幸村の名を一躍高めることになった出城真田丸の攻防戦術は、父昌幸が徳川秀忠の大軍三万八千を上田城で迎え撃ち、十日間も留まらせ天下分け目の関ヶ原の戦いに遅らせた知略を用いた戦術に通じるものである。

## 『川中島の戦い』信玄・謙信一騎討ちの場

## 中町第3場

戦国時代に、甲斐の武田信玄(武田晴信)と越後の上杉謙信(長尾景虎)との間で、北信濃の支配権を巡って争った総称「川中島の戦い」は、天文二十二年(1553)から永禄七年(1564)にかけて計五回行われた。

一連の戦いの中でも最大規模で、戦国有数の合戦となったのが、「鞭声べんせいしゆくしゆく 肅々」で有名な永禄四年(1561)の第四次合戦である。

妻女山さいじょざんに布陣した上杉軍は、武田軍の攻撃を察知し、夜半、濃霧に乗じて密かに山を下り、八幡原はちまんげらに布陣した武田軍本陣の眼前に近づき、霧が晴れると同時に総攻撃を行い戦闘が開始された。この戦いの最中に謙信は自ら馬に乗って信玄の本陣に単騎突入し、信玄に切りかかるも、信玄は掲げた軍配でこれをかわしたと言われている。

前半は上杉軍が優勢であったが、武田軍の別動隊の到着により、形勢が不利となった上杉軍は善光寺まで退き、武田軍も追撃を止めたため、明確な勝敗はつかず戦いは終結した。

両雄は、戦国史上最大の宿命のライバルでありながら、「戦国の末世に有難き名将」だとお互いに人物や業績を賛美している。また、謙信が敵国の甲斐に塩を送ったという話しは、戦国の美談として有名である。

信玄・謙信が生き永らえていれば歴史はどのように変わっていたであろうか。

## 忠臣蔵 山科の別れの場

## 下町・藤見町第4場

今をさかのぼること三百年、太平の世を揺るがす大事件が勃発ぼっぱつした。

元禄十四年(1701)三月十四日、江戸城中において播州赤穂藩主浅野内匠頭ばんしゅうあこう あきのたくみのかみ きら こうづけのすけが、吉良上野介にんじょうまつ ろうかに切りつけた、世に言う「刃傷松の廊下」である。

上野介は大事に至らなかったが、内匠頭は即日切腹、上野介はお咎めなしという裁きであった。

国元で知らせを受けた筆頭家老の大石内蔵助は、藩士を集めて評定を開いた。喧嘩両成敗の原則に反したこの裁きに、浅野家家臣は猛反発。討ち死に覚悟の籠城を説く者も大勢いた。

内蔵助は、浅野大学を名義人としたお家再興が最も大切であることを論し、開城へとこぎつけた。

山科へ移り住んでからの内蔵助は、伝を頼って書状を出し、お家再興へ向け精力的に働き掛けていた。しかし、お家断絶が決定的となり、内蔵助は、吉良邸討ち入りを決意するのである。

「山科の別れの場」は、刃傷事件の翌年四月に討ち入りの決意を固めていた内蔵助、主税親子ちからが、内蔵助の妻理玖りくとの別れを惜しむ忠臣蔵きっての名場面である。死をもいとわぬ覚悟の主税は、訳も分ならず別れを悲しむ妹に、涙をこらえ手を振り応えてやるのであった。その様を見守る内蔵助、理玖の胸の内はいかばかりであったろうか。

この年の十二月十四日、雪の降る深夜、討ち入りは果たされた。翌年二月には、大名家四家にお預けとなっていた四十六人の赤穂浪士全員に切腹こんじょうが命ぜられた。

大石親子にとって、山科の別れが今生こんじょうの別れとなったのである。

## 大坂夏の陣 真田幸村・大助親子出陣の場

## 桜町第5場

真田幸村は、永禄十年(1567)、信濃の小大名真田昌幸の二男として生まれた。歴史の表舞台に華々しく現れるのは、晩年のたった半年程に過ぎなかった。大坂の陣では、圧倒的な兵力差をもものともせず、徳川軍と五角以上の戦いをした。戦国時代伝説の戦術家である。

慶長十九年(1614)、高野山麓くどやま きんしん九度山で謹慎していた幸村は、豊臣秀頼ひでよりから招かれ大坂城へと入った。

大坂冬の陣では自ら築いた出丸「真田丸」で、寄せ来る徳川方の大軍を返り討ち大打撃を与えた。しかし、幸村らの活躍にもかかわらず和議は進み、大坂城は内堀さえ埋められ裸城はだかしろとなる。豊臣軍にはもはや城外決戦しかとるべき道は残っていない。幸村は嫡子大助とともに三千余の真田赤備え隊を率い、黒田長政と袂あかそなを分けた猛将後藤又兵衛またべえ隊とともに大坂城を出陣する。

豊臣・徳川による戦国最後の大战大坂夏の陣の中、武人として己の命の炎を燃やし尽くす幸村の戦いが始まろうとしている。

## — おたや祭と山車の由来 —

長和町の古町（旧長窪古町）に所在する古町豊受大神宮の例祭は、通称おたや祭として知られています。その起源は江戸時代末の文政十一年(1828)の文書が、現在のところ最も古い記録として残されていますが、お祭はこれ以前よりかなり古くから行われてきたと考えられます。

古町豊受大神宮では、伊勢神宮にならって20年ごとに遷座祭が行われ、例祭は毎年1月14日の夕方から15日の昼頃まで行われます。お客のある家庭は、この日を年始にして、その歳の出発とするのを慣わしとしています。参詣の人々は上田、佐久方面からも訪れ、この2日間に4～5万人ほどの人出が予想されます。

おたや祭には、庶民の生活が安定して余裕が出てくると、お祭りを盛んにするために山車が奉納されるようになり、旧家所蔵の天保六年(1835)の日誌に記載されています、「御田(旅)屋賑わし、かざり物数ヶ所美事也」との一文が、現在判っている最も古い山車の記録です。

山車は素朴な農民美術を伝承する貴重な伝統文化として、昭和38年に長野県無形民俗文化財選択に指定され、現在は区単位の5場所の保存会によって奉納されています。

※裏面、各場山車の位置図

長和町おたや祭山車保存協賛会

平成27年(2015)1月

# おたや祭り

## 山車の位置

